

## 『環境共同体としての日中韓』

寺西俊一監修 東アジア環境情報発信所編（集英社新書）

わが国と中国、韓国は、経済面においても、文化や人の交流の面でも、飛躍的につながりが強まっているにもかかわらず、最近、ぎくしゃくすることが目に付く。そのような中で出版された本書は、まずそのタイトルに目を奪われる。

監修者の寺西氏は、この十数年、「アジア・太平洋NGO環境会議」や『アジア環境白書』等をとおして、アジア地域全体を視野に入れた環境問題に取り組んでこられた。本書は、その豊富な蓄積の上に生み出された。

構成は、次のとおりである。

- 第一章 世界の中で影響力を増大させる日中韓
- 第二章 既に環境共同体!? 相互に環境破壊を輸出し合う日中韓
- 第三章 日中韓の環境問題には大きな共通点があった
- 第四章 各国が直面する深刻な環境問題
- 第五章 未来に向けた取り組みが始まった

日中韓は、相互に環境問題を輸出しあっているし、共通する問題を多く抱えている。また、日本で過去に発生した問題が新たに中国や韓国で発生している。そして、巨大な経済圏になった日中韓三国は、環境に与える負荷もまた巨大になった。このような切り口の下に、本書では、三国における環境問題が極めて具体的に描かれている。

取り上げられる問題は、大気汚染やCO<sub>2</sub>排出、高濃度農薬付の「毒菜」、有害物質に脅かされる食と住、廃棄物とゴミ、繰り返される公害、水危機と砂漠化、遺伝子組み換え作物、生物多様性の破壊、野生生物の危機、干潟の死滅、ダムと原子力発電所など、日中韓

三国で発生しているあらゆる問題がリアリティーをもって描きだされている。

本書は、新書版のコンパクトな本でありながら、監修者および23名という多数の執筆者による共同の成果である。しかし、不統一なところはまったく感じさせない。執筆者の間にしっかりとした共通の視座が打ち固められていることの表れであろう。

あらためて、なぜ「環境共同体」なのか？ 監修者は次のように述べている。すなわち、そもそも大気、河川、海洋などは、「国民国家」の登場以前においては、「領有権」のもとで相互に分断されて統治・管理される対象ではなかったこと、すなわち、それらは「環境的な共有資産」であったこと。そして、「国民国家」の原理が成立して以降、これは国境により分断されてしまったが、今日、相互協力的な共同管理のための新しい原理や機構を模索し、創出していくことが求められる時代になっている、ということである。

このことから、二つのことを確認させられる。すなわち、靖国参拝、歴史認識、「反日」等の問題はまさに「国民国家」としての政治に関ることであり、政治・外交問題として正面から取り組むべき課題であること。しかし同時に、日中韓三国の間には「共同体」としての環境問題が厳然として存在し、共同の取り組みが求められている、ということである。

本書は、読者にそのことをいやおうなく実感させ、そして、自分は何をできるのか、と問いかけてくる。

（2006年1月 税込み735円 254頁）

（石田信隆）